

昭和四十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和四十三年二月十五日 發行
(毎月一回・十五日發行)

(通第二二五号)

次

内は愚にして、外は賢なり……………近角常観…(1)

愛書と求道……………福島政雄…(9)

近角先生著「親鸞聖人の信仰」①……………西元宗助…(13)

福島先生著「親鸞聖人を仰いで」……………川畑愛義…(14)

医学と宗教……………川畑愛義…(14)

善惡の業報と其救済……………花田正夫…(19)

ともしび……………聚墨生…(22)

目

慈光

第二十卷

第二号

内は愚にして、外は賢なり

近 角 常 観

本日の題は「内愚、外賢（ないぐ、がいけん）」としておきました。これは御存じの通り親鸞聖人の言葉である。聖人は常に自分のことを「愚禿、（ぐとく）々々」と言われた。どうも度々云うことであるが、私はいつも親鸞聖人の事のみを云っている。しかし如何ほど謂っても、とても充分にお話しすることが出来ぬ。

勿論その信心の味わいに至っては、平素とすこしも変りはないが、いつでも話したあとから見てみると、やつぱり自分勝手に引きつけて居って、どうも充分と云えない。つまり解っただけしか言えぬのである。いつもあとから気づいては深く恐れ入る次第である。この愚禿という語についても同じである。聖人が愚禿と仰せられたことは、すでに度々申し、自分でもよほど解った積りで居った。しかし後から見ると矢張りそれがほんとでない。今日申す処も後になれば、必ず不十分なことであらうと思う。またこの席で不足と感ぜらるる方もあるかも知れぬ、私はなるべくそう

いう、方の感じを聞かせて頂きたいのである。

さて今迄別に何とも思わなだったが、親鸞聖人の著書の中に「愚禿鈔（ぐとくしょう）」というのがある。これは真宗の方はよく御存じのはずである。真宗において肝要がっているだけ、それだけ大切の聖教である。この「愚禿鈔」という題号からして非常におもしろい。聖人の御心では或は愚禿の覚え書き位であったかも知れぬ。それからその書き方がまたよほど変っている。一寸いって見れば、一つには聖道、二つには浄土。一つには頓教（とんきょう）、二つには漸教（ぜんきょう）、……と頭から先ずこういう具合で、実におもしろい。華嚴の鳳潭と云えば徳川時代での仏教学者であるが、この鈔を見て、親鸞の胸附けに違いないと云ったそうじゃ。聖人の極く晩年の作である。唯これだけを見ても、聖人のやり方がよくわかると思う。ことに奇妙なことは上巻下巻共に一日で書いてあることで、巻

?

末の日附が二巻共同日になっている。或は前に書いてあったのを、その日に清書せられたのかも知れぬが、しかし何となく一日に書きあげられたものの様にも思われる。とにかく現今の版では巻末の年月日が全く同一になっている。

さて初めに今の愚禿鈔と題号があつて、その下へただちに

「賢者の信を聞いて、愚禿が心を頭（あら）わす。

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。

愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり」

唯これだけの六句が出してある。文はきわめて簡単であるが、愚禿の意義はこれで充分にわかると思う。賢人の内賢にして外愚であるが、愚禿の外は賢でも内は愚であるとは如何にもありがたい言葉である。

私は愚禿という文字について、色々と考えて見た。化身土（けしんど）の巻には「しかればすでに僧にあらず俗にあらず、この故に禿の字をもって姓とす」と詠してある。又よく申すのであるが、涅槃經の中には破戒の人をもつて禿人とするという文があることを知った。私が発見したのではないが、深草の元政上人の「如来秘蔵録」を見たら、この文が引いてあったのである。後から気がついて見ると聖人が自ら禿と仰せられたは、どうもその辺に目をつけられたものらしく思うのである。御存じの通り聖人は涅槃經

を最もよく読まれた、教行信証の中でも最も多く引用してあるのは涅槃經である。聖人が禿といわれたのはどうして、も単に頭髪があるというばかりではない、自分は破戒の比丘であるという意味が充分にこもってあるらしい。

かく愚禿と言われただけで聖人の人格はよくあらわれている。けれどもこれだけの考えならば、私は「信仰の余蘊」にも書いておいた。御承知の通り、その書に「外柔にして内剛なるべし」という一章があつて、聖人には内に剛なるところあつて、しかも外には柔である。腹の中には仏の慈悲をやどして、しかも表ではごく浅ましいと云つておいでになると書いてある。

しかしこれでは聖人を讃歎するとしては差支えはないがその御心持の味わい方がまだ足らぬ。私はややもすると、初めの中はこういう風に思つたのである。即ち聖人は自ら破戒と看板を掲げて、自分の身を下げられるだけ下げてしまわれたのだと、こう考えたこともあつた。しかしこれでは自分で自分を歎くことがない。倒れて相撲を取る処は見えるが、悲歎の意義の味わい方が足らぬ。内剛外柔であるから、腹の中に仏陀を頂いて、外面人の誹謗等はすこしもかまわぬとしても、それは無論道理からは明らかにわかるけれどもそれでは自ら愚禿といわれた味わいがない。私は聖人が自分からわざと言いついて仰せられたというよりも

むしろ自己の悲歎のあまり、心根から歎いて仰せられたお言葉と頂くのである。その味わい方がどうも我々は不足している。

「悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚（じょうじゆ）の数に入ることよろこばず、真証（しんしょう）の証（さと）りに近づくことをたのしまず、恥ずべし傷（いた）むべし」信巻

というこの語気は単に自分の身を下げただけの語ではない悲しいかな、自分は到底駄目であると、根底から泣いて居る形が見えるのである。そうなつてはじめて先程の

「賢者の信は内は賢にして外は愚なり。愚禿が心は内は愚にして外は賢なり」

というあの文の真味がよほど頂けると思う。どう考えてもこの文は悲歎を心底から表白せられたとしか見る事が出来ぬ。

この文については古来種々の説がある。或は賢者とあるは、即ち御師匠の法然上人をお指しなされたのであるという説もある。けれども、そうしてはすこし都合が悪い。私は唯一般に古来の聖者をお指しなされたので、釈尊でも誰でもよいと思う。若し単に法然上人のみとすれば我々からうかがうとすこしおかしいような気がする。法然上人は内

る。本当は苦悶の事など人の前で話の出来るものでない。それからまた近來雜誌などに、よく人の懺悔がのせてあるしかしその書き方があまり面白くない。何だかその人が今までは非常の悪人であつたかのように書いてある。これは大きに心得べきことと思う。この頃になつて懺悔する人がにわかに多くなつた。多くなつたのは、内心から自分は悪るかつたと自覚する人がふえたからで、懺悔そのことは宗教上の意味である。全体懺悔は美しき心から出るのである内心に仏が来たもうより発するひかりである。人の懺悔は大いに尊敬すべきであらうと思う。しかし懺悔する方では決して自分は懺悔をしたという気があつてはならぬ、またあるべきはずはないと思う。

ところが親鸞聖人においては、そういう点がすこしもない。賢者となるは、誰にしてもよからう。法然上人と見てもよろしい。法然上人は自ら愚痴の法然坊、十悪の法然坊となげておいでになる。さりながら親鸞聖人の眼から見れば、そうとは思われぬ。御師匠法然上人は実に内賢にして外愚でおいでになる、もうどこに一点の打ちどころがないそれにくらぶれば、親鸞自身は、いかにも浅間しいことではないか。すこしも内に清浄の心がない、見渡す限り唯愛欲と瞋恚とである。実に内は愚にして、外に賢をよそおうて居るのである。ずうずうしくも表には法衣をまとい、人

は賢にして外は愚でいらせられるも、親鸞自身は内は愚にして外は賢であると仰せられたとすれば、まるで正反對である。聖人は常に法然上人とは一つの信心だと仰せらるる、しかしこれでは何だか信仰状態が異つてあるように見える。全体、信仰から言えば内賢外愚ははじめから話になつておらぬ。このところは我々の深く注意せねばならぬ点であらうと思う。人あつて自分は非常の悪人である。自分は非常の苦悶をしたと告白する。告白そのことは一種の宗教的懺悔であつて、実に立派なことである。けれども、苦悶をしたとか何とか言え、何だか大変えらそうに見える。ややともすれば、自分は何か立派な事でもしたかの様な思いが起る。これは非常によろしくない、大いに謹しまねばならぬことだと思ふ。

先日もある人が来て私に自分の苦悶の懺悔をされた。そして云わるるには、私は今まで先生の苦悶を大変立派なことと思つていたが、結局煩惱の多いことであると話された実にその通りである。

ここで云うては、すこし話の順序が転倒して来るが、どうも近來はこの辺がすこし逆しまになつていはいせぬかと思ふ。私などこの二三年前までは恥ずかしうて自分の苦悶を人に話し得なかつた。何故かといへば、自分はあの時、たしかに氣狂ひになつて居つたと思ひ込んでいたからであつた。向つては法を説いて居るが、いかにも悲しいことである。と強く悲歎せられたのである。かく悲歎のお言葉と頂けてこそ、はじめて真意を味わわせて貰うことができるのであるこの沈痛な悲歎述懐のお心を味わわすに、我々は唯悪人の看板をかけさせられた如くに思つてゐる。これははなはだしく勿体ないことと思ふ。

信仰の経験の時は誰しも自己の罪惡を感じる。感じて仏の光に接するのであるが、一旦信仰を得たのちは、時のたつに従つて、ヤヤもすれば、そういう心が起り易い。信後の修養については大いに注意すべき点だと考える。

ところが聖人においてはそうでない。晩年になればなるほどいよいよ悲歎が強くなつてゐる。それはどうかというに即ち聖人のお作の悲歎述懐和讃（ひたんじゆつかいわざん）がそれである。これは聖人の晩年の作であつて、その有様をよく頂くことが出来る。

「浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身に清浄の心もさらになし」

真実の心はありがたしとは如何にも思ひ切つてやられたものである。もう一点の余地もない、すつかり悪が言い切つてゐる。ことにそのはじめの題目には「愚禿悲歎述懐」としてゐる。この題目でも、よくうかがうことが出来る

思う。ここに至ってはもう何とも云うことが出来ぬ、実にひどいことを言われたものである。

然るに世間に往々、この述懐をもって他の意味に解し、当時の悪風を慨しての御述作であるという説をなす者がある。これは大変な間違いである。無論この中にはすこしはそれもある。しかしその外はすべてみな御自身の悲歎のみである。

「浄土真宗に帰すれども」とは、聖人から見れば、法然上人の浄土真宗である。その法然上人の浄土真宗であればそのやり方は内賢外愚でなければならぬ。しかるに愚禿にいたっては、内賢外愚で、内には汚い心をかくしながら、表には賢げな姿を現しているという悲しみである。この和讃はすべてみなこの筆法で出来ている。

「外儀のすがたはひとごと賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪偽おおきゆえ奸詐もはし(百端)身にみたり」すなわちよく云う善導大師の「ほかに賢善精進の相を現することを得ざれ、うちに虚仮をいだけばなり、貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性やめがたく、こと蛇蝎におなじ」の御文と同じである。

我々は常に、賢い風をするな。何事も仏にまかせよと云っている。しかし聖人の御意では、こんなまぬるい話ではない。お互にどうである、外には賢げな顔をして居るで

も絶対に出ていらるからして幾度話しても充分に話すことが出来ない。全体我々は善といえど善、悪といえど悪とその一方に片よるからいけない。

先日も学舎の或人が来て話されるには、自分ははじめなんでも、外柔にして内剛でなければならぬと思うて居ったところが或晩不思議な夢を見た。夢の中に一人の僧がおいでになって、私に向い「内柔でも外剛でもそんなことはどちらでもよいでないか」と告げられた。醒めてから考えて見るに、何とも云えぬありがたい御示しであったとて、大層よろこんで話された。聞く私も非常にありがたく感じたのである。内剛でも外柔でもそんなことはどちらでもよいという一語には、甚深の意味がある。これだから、かくせねばならぬと思うと、モウすでにそれがいかぬのである。かくの如く聖人の悲歎は実に強い。たとい我々が、や、どうしましてと申上げて決めて御満足はなさらぬ。それで我々が聖人をもってえらい方であると仰ぐよりも、そこをば各自に引きあてて頂いた方を聖人はどれほどお喜びになるかわからぬ。我々にしてもそうである。自分で非常に罪悪であると感じている時には、たとえ人がいかほど善いと云うてくれても決してよい感じのするものではない。唯讃歎して言えば言うまでである。しかし聖人のお示しなされ処は、即ち我々の心の実状なのである。我々がどんなに講話

はないか、と自分もそうであることを自覚して現じてる人に向っていう語である。今までは賢げな顔をして戒をたもとうと思うた、しかし到底出来ぬ、だからありのままにやれ、というような軽い云い方ではない。みんなが偽善をしているのである、それだけでも実に浅ましいとの強い意味である。

「悪性さらにやめがたし ころろは蛇蝎のごとくなり 修善も雑毒なるゆえに 虚仮の行とぞなづけたる」色々善をやったにしても、我々のすることはすべてみな雑毒である。

「無慚無愧のこの身にて まことのころろはなければども 弥陀の廻向の御名なれば 功德は十方にみちたもう」この和讃にいたって始めて仏陀のひかりがはいってきたすべてこの悲歎述懐和讃は、帖外和讃(じょうがいわさん)と正反対になってある。この和讃の反対に極端の歡びを詠ぜられたのが帖外和讃である。

「大願海の中には、智愚の波こそなかりけれ 弘誓の船にのりぬれば 大悲の風にまかせたり」

実によく絶対の歡びがあらわれてある。かくの如く喜びにしても、また悲歎にしても、両方とも絶対的にいくのが親鸞聖人のやり方である。悪をいえば、こんごろくに悪になる、喜びになればどこまでも喜びである。かく何れにして

を聞き、また如何程説法をしたにしても、やはり人間は飽くまで人間である。心の実状にいたっては旧にかわらず、どこまでも浅ましい。それであるから、自分は実に浅ましいものであるとの自覚を生じた方が、却って聖人の御本意に叶うのである。そうなっではじめて愚禿鈔のはじめの文が生きてくる。真に聖人の信仰にはどこに一点の欠けがない。

お互に先ず自分の上に考えるのが一番早い。我等は実に戒律一つたもつことの出来ぬ浅ましい身の上なのである。前にも云ったが聖人は

「誠に知りぬ、悲しい哉愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快します、恥ずべし傷むべし」と歎かれた。まことに沈痛、骨に徹するの懺悔である御慈悲に気づかせて頂きながらも、それをありがたいと思うことを知らぬ、急いで浄土へ生る身と定めて頂きながらそれを喜ぶことを知らぬのである。それ故に内愚にして外賢なのである。聖人の御意ではむしろ外賢の方に充分の力がこもつてあるのである。

「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもうまし 如来の願船いまさずば、苦海をいかでかわたるべき」ここまで行けば実にえらい(またうっ、かり讃歎してしも

うからいかぬ)。本来我々には人の事などかれこれいふべき資格は無いのである。小慈小悲の一つさえない浅ましい身の上ではないかとときつく云い切ってしまったのである。善導大師の観經の散善義には「たとい身心を苦勵して日夜十二時、急に求め急に作して頭燃をはろうが如くするもすべて雑毒の善と名づく」と云うてある。さりながら悲しいかな、我々はこの雑毒の善が出来ないのである。雑毒の善でも出来たらそれは実にえらい。ところが我々は貪瞋邪偽奸詐百端をば、先ず先決問題としておいて、それだから我々は出来ぬ、とここへ力を加えて来る。親鸞聖人のほうではない、始めの方へ力がはいっている。たとえ自力でもよいから、善が出来たらば非常にえらい、けれども自分は悲しいかなそれすら出来ないのであると、ここへ力はいっている。我々はその逆で、だからという処へ力をおいている。

「蛇蝎奸詐のころにて 自力修善はかなうまじ」

如來の廻向をたのまでは 無慚無愧にてはてぞせん」

蛇蝎奸詐の心と気づいたは、即ち如來廻向の御恩であるもし如來の御廻向がないならば、我々は無慚無愧でおわるより外ないのである。

さて只今お話したのは最初の四五首であるが、述懐和讃はこの外に沢山ある。しかし何れも人に向って云われたの

ではない、皆自分をお歎きなされたものばかりである。けれども中には少しは人に対しての仰せもないのではない。例えば

「五濁増のしるしには この世の道俗ことごとく 外儀は仏教のすがたにて内心外道を帰敬せり」

の如きそれである。聖人は何を云われても絶対的だ、この話の如き実に強い。外面にはみんなが仏教をよおうて居るが、当時の僧も俗もことごとく外道だとの仰せである。当時は御承知の通り、南都北嶺に随分ゆゆしき学生達が沢山に居られた、いずれも外面仏教を説いてさも殊勝気な風をして居らるる。しかし一度聖人の眼に入っては一文の価値もない、皆一帯の外道と映じたのである。今日でも真如とか、哲學とかをかれこれ云っている人達は、聖人から外道と呼ばれても仕方がない、またいつの間にか自分の得手が出てきた、これだから我々は駄目である。

かくの如く悲歎として味わえば、何もかも皆わかるのである。「愚禿鈔」もわかる、「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ」もわかる、「雑毒の善」も何もかもすべて頂けるのである。いずれも人の上でない、自分のことを告白せられたのであった。

「浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし」の如き一応考えただけでは理に合わぬ、けれども悲歎懺悔である

歌集

「遊林」

柴野 春草

△愛語▽

和顔愛語のみざとしに笑顔みせ居れど我執のしこりなおのこりたる

おのづからはからはれてゐて今日あるを知らしめむとの六字のみ名か

み名のまこと伝ふるまでぞみ名をおきて末とほりたる何物やある

△善人▽

我は正し悪しきはすべて他にありときめてかかりて省るなし

われは悪しと思ふことなきこの人に今更我の言ふこともなし

思ふさまにならぬをいろいろの所為と胸立ちちらし省るなし

から、かくありてこそありがたいのである。懺悔を云えばどれ程皮をむいても、皮は尽きない。如何ほど地面を掘っても地面は地面である。そこを聖人は「如何にして見ても地面である」と捨てられずして、何処までも歎いておいでになる。そうして頭をめぐらしては、かかる者を救いたもうが仏の御力であると、絶対の喜びに出て居られるのである。その歎喜の極にいたったのが即ちさき程申した、「大願海のうちには煩惱の波こそなかりけれ 弘誓の船に乗りぬれば大悲の風にまかせたり」以下九首の帖外和讃である。それ故帖外和讃は悲歎述懐の正反對で、極端の慈悲ばかりになっている。聖人は晩年になればなる程御悲歎の深くなっているとともに、弥々仏の御力を喜んでおいでになる。

これを要するに、聖人をば我々が「えらい方である、我々はとても及ばぬ」と讃歎するよりも、各自に引きあてて同一の法味を頂くのが肝要なのである。聖人はえらい方であると如何程讃じあげてもチツともお喜びにはならない。人の善悪にはかかわらず、唯仏慈の偉大なるを喜ぶのが聖人の御本意である。今日は「愚禿」の語についてすこし味わわせて頂こうと思つて以上の話をした。以下略。

愛書と求道

近角先生著「親鸞聖人の信仰」①

福島政雄

明治、大正の親鸞とさえ或る人は近角師を仰ぎ称えていた。併し師は親鸞聖人の要素と蓮如上人の要素とを兼ね備えて居られた。その信仰の熱は祖師を伝え、その政治的眼光は蓮師を受けて居られたと云いたい。従つてその感化は日本全国に及び、その眼光は日本仏教の将来について深い憂慮の点を明察せられるという有様であつた。

師がその若い張りきるような信念をもつて伝道せられたのは、明治の三十年代凡そ十ヶ年ばかりの間であり、その当時のことを師は次のように云つて居られる。

回顧すればはや九年以前のこととなつたが、明治三十二年大日本仏教徒同盟会の当時、恰も飯山の対岸の山に初雪の少しく見えた折、当地方（信州飯山）へ初めて参りました。それから西洋へ参りましたが、帰つて来たのが三十五年、この時東京において佐崎君に遇いましたのが端緒となつて、次の三十六年には東北地方に伝道して

あつて、一にも二にも聖人の事を何かなしに云うので、私自身のことではないようにもあろうし、また他の一面から見ると、全く私自身のことばかり云うので、一向に聖人の仰せでないようにもあろうが、私自身の信仰と聖人のお示しとは、全く区別の出来るものではなくして、自分の信仰の味がすなわち教行信証の味であり、また教行信証は全く聖人一代の人生の上における活躍である。

このように云つて師は聖人のお恵みに対する深い感謝の心持をもつて、この講話をして居られるのである。それで先ず教行信証の総序の終りの言葉を引用せられる。

爰に愚禿の親鸞、慶しき哉、西蕃月支の聖典、東夏日域の師釈に遇い難くして、今遇うことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり、真宗の教行証を敬信して特に如来の恩徳の深きことを知りぬ、斯を以て聞くところを慶び獲るところを嘆ずるなり。

真宗という言葉の意味を第一に述べられている。これは真言、天台などに対して相対的に名づけられたのではない真実の宗教という意味で、一代仏教の精髓というのである真宗という言葉の始まりは、中国シナの唐の時代の善導大

酒田から越後の方を経て東京へ帰る途中、たしか七月十二日と記憶しておりますが、太田村の真宗寺、柳原村の正行寺において尽夜にわたつて演説を致した。これが御当地（飯山）の修養会の濫觴である。翌三十七年、この年は東京の求道学舎では歎異抄を講話して居った。

この「親鸞聖人の信仰」は明治四十年の夏、信州飯山附近の修養会において講話せられたものであり、聖人の著としては御本書、又は御本典と称せられる「教行信証」についての慶嘆講話である。師の生前に私が聞いたところでは教行信証はむずかしく説けばどこまでもむづかしく、併し中心の精神を述べればむづかしいものではないということである。今はこの講話の要点大略を述べて見たいと思う。先ず師は次のように言つていられる。

この度の話をば一面から見ると全く聖人の仰せの言辞で

師が「真宗遇いがたし」と言い「念仏成仏是真宗」と云つたのが最初である。これは一つの宗派を意味したのではない。それで真宗という言葉は実に味が深いのである。この真実の宗教に遇えば口を極めてこれを讃歎せずには居られない。宗教のことは慶喜讃歎より外にはない。聖人は慶喜讃歎をなさるばかりであると近角師は云う。

然らば仏の真実とは何であるか。聖人の言葉で言へば回向である。回向とは自分の心を回して仏に向けるので、百般の自行を仏陀に捧げるとか、他の為にするとかして、寸毫も自己のためにせぬというのが回向という文字の正当の意義である。併しこのような回向は必ず行きつまるものである。近角師は次のように言われる。

現今の青年にして苟くも道德に向かい宗教に向かうものは、皆自身を捨てて他の人に向かうか、自己を抛つて仏陀に向かうか、何れにしてもいわゆる回向心を以て励んでいることであるが、それがなお自分が能く為し得ると安んじて居る間は何事もないが、一旦自分はとても安全にこれを遂ぐることは不可能であると氣附いてみるとここに大なる苦に陥らざるを得ない。この場合になつてみると、自分は到底出来ぬから止めるということも出来ず、止めずにやつてのけようとしてもなお出来ず、進退

きわまって遂に立場を失うにいたる。

このような窮地に陥った者は、どうなるのであるか。そこに唯一つ現われ来った道があると師は言われる。

それは何であるか。ここは口では言いあらわしきれぬ点であるが、しいて言えば、自分には到底行えぬから苦しんで居るものと見捨てたまわぬ恵みが向こうから現われたのである。併しこの場合でも仏の御恵みをほしいほしといと云うて居る間は、それもなお一つの回向である。自己の為に信仰を得んとつとむる心が強くなるほど、自分の回向心が退かぬから、かえって意外千万に信仰に入り難いのである。

然らば如何にして安心を來たしたかというに、この点はどうも口には云えぬ。しいて仮に言うならば、自然に向うから恵みが向いて來たのである。意外千万である。自分は仏の恵みに包まれたのである。この信仰は求めて得たにあらず、先方から來て下された。我々は常に悪心をひるがえして仏に向かさんと努め苦しんであったものが一大転換を為して、全く仏の方より我々の方に偉大なるものが向いてきて下さった。

そこで回向の文字の意義も全く方向転換を為してあらわ

ここにこの仏の恵みの根源を言いあらわすのに、本願という言葉が最も適切であると師は言われる。我々の耳に慣れきっている本願という言葉が最も新しい語として力強く感ぜられると云われる。

聖人の御著述を拝見いたすと、本願という言葉が基本となつてある。単に慈悲という、ただ何となう親切の感じが我に來ることを表するまでで、文字が抽象的だけに物足らぬ感じがする。慈悲の喩には常に親の事（ちやうしよ）を云うが親が子を日夜に憐むその親心は何かと、もう一つ押すと至愛至極の本願であると云わねば慈悲の極致を言い尽くすことが出来ぬ。本願という言葉のみが、よく絶対の仏陀が昼夜断えざる念力を以て、日夜に我々に対して下さることを表わしている。

名号というも、光明というも、その本源は仏陀の御親が我々に対する本願で、実に確乎動かざる偉大なる力である。この力を認めずに従らに途中に坐りこんでしまうのは、他力どころではない、それは無力である。他力というは、今までの如き自力の回向では到底やりきれぬこととなつて、願れば、他即仏願力の非常の恵みを以て我の上に蒙らされる親の念力のあらわれである。親の誠の我に対する心であると言わねば尽くさぬ。そこで聖人は、

來て、仏陀より我等を回向して下さるといふ意味になつてきた。この意味を以てする回向が心に味わるところが信仰問題の結局である。聖人が「謹んで浄土真宗を案ずるに二種の回向あり」と言われた。回向は全くこの意味である。

この仏からの回向は一生継続（ぞくぞく）ものである。一時的の感激というようなものではない。そのことを師は次のように述べられる。

親鸞聖人の上を見るに信仰の発（は）る一念のみならず、それから以後の人生百般のこと、何から何までもすべて仏の恵みから成り立っている。

私も十年前、回向を賜（たま）ひて、それきりでなしに、信仰以後何事も皆他力の回向であるとありがたく喜んで居ります。此方からは計らひばかりである、皆向（むか）うからどんどん下して下さる。此の如くに（で）最終に仏果に至るまで此の回向の泉の絶間がない。よって聖人は「二種の回向あり」とのたまひ、殆んど人生のすべてを尽くして回向の中に入れてしまつて、何もかも皆仏の恵みを蒙らぬものはないと云われたのである。

「他力というは如來の本願力なり」と言うて居られる。

歎異抄を見ても「弥陀の本願には老少善惡の人をえられず」と言い、「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、弥陀の本願（さまた）を妨ぐる程の惡なきが故に」とある。極まりなき偉大なる御力が私の方にあらわれ來った他力の至極を十分に遺憾なく言いあらわしたのがこの本願という文字でありますと近角師は言われる。

聖人の意を以て見れば、釈尊一代の教説は華嚴（けごん）から涅槃（ねはん）に至るまで皆この仏陀の眞實至誠を説くの外はない。これが仏の本願である。この本願を深く説かれたのが大無量壽經である。「教行信証」の教の巻に「それ眞實の教をあらわさば大無量壽經これなり」と言われている所以である。

昭和四十一年七月稿了。人間と眞理誌。

親鸞聖人を仰いで

福島政雄 著

定価 四五〇円、送料七〇円。

振替 京都二五七八八番
発行所 京都市下京区堀川通花屋町百華苑

福島先生の

「親鸞聖人を仰いで」を読んで

西本 宗 助

このたび福島政雄先生が『親鸞聖人を仰いで』と題する装幀の美しい一書を公にせられたことは喜ばしい。この書は、東京の築地別院で折々に講話されたものに筆を加えられたもので、一貫して流れているのは、この書の表題の示すように、著者の聖人を仰ぎ、聖人に帰依する真情であり思想であり、生活である。

先生は巻頭でまず「日本教化の源流」と題して、親鸞聖人が「父のごとくにおはします」「母のごとくにおはします」と、奉讃された聖徳太子についての感銘を、長年にわたる聖徳太子の御研究を背景となさりながら、しかも極めて平易に、滋味深くお話しになっている。

ついで「仏典と私」と題しては、近角常観先生をご縁として先生が心機一転なされる前後のことを軸としながら、殊に大無量寿経五惡段についての味読を述べていられる。

しかし、教養の豊かな先生は、法華経・華嚴経・涅槃経等についてのお味いをも述べ、さらには親鸞聖人を西洋のルーテルと比較し、あるいはアウグスチヌスや、ソクラテスにもふれながら、真実の宗教の帰結である親鸞聖人の大

信海の風光と、その光に照らされつつ人生の晩年を蕭々として歩まれる御自分の生活の一端を自然に披瀝していられるのであって「晩年の親鸞聖人」から最後の「二河喻の人生」の章にいたるまで、まことに滋味あふれる御文章である。あえて、ご縁あられる方々の御一読をおすすめする。

○

なお福島先生と申せば、この春、私がカリホルニア州のスタクトンにまいったとき、スタクトンの仏教会で浅井静香さんという、それは可愛い老夫人にお目にかかったが、このおばちゃんから福島先生や花田先生はお元気でいられますかと、おたずねにあつかったことを想いおこす。なお浅井夫人のほかに「慈光」誌の愛読者は北米に約百余名ほどもおられて、それはそれはたいへんお世話になりましたことに浅井夫人の親友のロサンゼルス清水しげる夫人や万里さんなど。みんな、よく仏法をよるこんでおられて、感激から感激でありましたが、それはまたの機会に述べさせていただきます。

昭和四十二年十一月三十日

医学と宗教

川 畑 愛 義

人間の幸福とは

私は南九州の山の中で生まれたのですが、よくよく業縁の深いやつとみえて、信仰の厚い土地に生まれながら、お念仏に対して一種の反感をもち、また坊さんのいうことは何かごまかしのようになっていました。

ところが、こんど医学の国際学会に参加するためにチェコスロバキヤへ行ってきました。この国は「宗教はアヘンである」ということを国是としている共產主義の国であります。だから社会の組織、運営、制度というものが、何から何まで反対であるといってもよいのです。ところが資本主義の国と、共產主義の国とは、おたがいゆるしがたいものを持っているけれども、そこに住んでいる人たちの心はまったく同じです。やはりお金はほしいし、女友達、男友達がほしいという、人間の本性はどこへいっても同じだということを感じました。

そしてもう一つは、この医学の国際学会は四年ごとに開

かれるのですが、四年間に医学は非常な進歩をしていることです。だから現在、私たちが最新の医学として間違いないものだと思っている、その医学が実はそうではなく、もう明日になると、いろいろな欠陥や、矛盾が発見され、とどまるものでないということを感じました。

そして帰りに北欧のスエーデンにたちよりましたが、ここは世界でもっとも社会福祉の進歩した国でありながら、しかも自殺者が世界で一番多い国であることです。社会環境がよく、青年も老人ものんびりとすごしているようですが、世界で一番自殺者が多いというのは、人は社会制度・組織・施設では救われないうことです。人間の真の幸福は社会の中にはなくって、本当は自分自身の心の中にある問題ではないかと感じたのであります。

またアメリカに渡り、ボストンで知り合った大勢の人達と話しあつたところ、ある指導者から

「アメリカは、国家の高い繁栄を目的として国民が努力

をしてきた。そして現在、アメリカ国民は、ある程度この理想を達成しつつあり、世界でもっとも高い繁栄を勝ち得ている。それならば、それに相応してアメリカ国民は幸福という実感を持っているかといえは、否である。そこでアメリカは、もう一つ新しい指導目標を立て直さなければならぬ」

と聞きました。というのはアメリカのエリート大学の多くの学生がL・S・Dという麻薬をもちいている。そして性道徳が著しく低下しているといった、パイオニア開拓者的なアメリカ精神は次第に失われてきて、自分の享楽、物質的な欲求を優先する思想が若い人達にみながっているのをどうすることもできないそうであります。

その後、サンフランシスコのヒッピー族を見て、その異様な光景におどろきました。若い男女があられもない姿をして、退廃的な音楽によいしれている。これはアメリカの全てではありません、ごく一部ではありますが、しかしそのようなアメリカの裏側には、アメリカの危機があるということを知らねばなりません。

ここにおいて、やはり社会的な繁栄、社会の改善といったものでは、本当の人間の幸福というものは、十分に獲得することができない。勿論社会の改善、環境の整理ということも大切です——が、しかし、究極的にはそこにも人間

めれば求めるほど大きな壁にぶつかるといふような気がしました。そこでもうダメだ／＼考えないことにしよう／＼と思い、遊んでやれということにもなりましたが、人間とは複雑なもので、遊んだあとは楽しいどころか、かえって淋しさがこみあげてくるものです。その後大学へ入っても「心の眼をひらけ」といわれたことが課題であったわけですが、そのころ考えることは、死をも感謝するということは、倫理や科学の世界にはない。私というものがあかぎり、それは相対である。かりにカントがいう純粹理性というものがあり、その純粹理性の力が之に真理の光がうつされたとしても、それは究極するところ人間精神の所産である。カントはそれを人間を超えた世界でというけれども、やはり人間の一つの心理作用に違いないわけですね。

生命の実体

そうしてみると、主観をはなれるといつても絶対的な客観ということはありません。私どもの解部生理では、人間が考えるというのは、前頭葉の中の大脳皮質である。大脳皮質というところは、約二億五千万の細胞からできています。人間全体では二十兆にも達する細胞からできています。このことは何を意味するかというと、人間のからだの中の細胞はたえず生まれて、発育して成熟をし、そして死

の幸福はない、ということであらためて感じたのであります。すでにアメリカの一部には、従来のプラグマチズム（実用主義）という考え方に対応して、何とか東洋の深い哲理を持ってとくに仏教精神をきわめたいという空気が感じられたのであります。その中で、ある神学の学生が、日本の仏教の勉強がしたいといっておりましたが、なるほど世界でこれくらいすぐれた宗教はないであろうと思ったのであります。

死をも感謝する世界

私も小さい時から仏教というもので育ちながら、反仏教的な態度ですごしてきました。それから小学校で入試の勉強をしているとき、担任の先生が「君たちは中学に入るといふことが大事だと思っているらしいが、それより、もっと大事なことがある。それは心の眼（まなこ）をひらくといふことである。そうすれば死ぬことだって恐ろしくない。ときには死をも感謝するような世界がひらけるよ」というようなことを話されました。

この静かにいわれた言葉が、中学の時も、高等学校へ入ってからフット思ひ出されたのであります。そこで、私は突き詰めて考えるといふことはないのでありますが、いつたい先生のいわれたことはどういふことであろうかと、いろいろ考えてみたのですが、考えれば考えるほどわからない。求

にます。ですから私たちの生きていくからだの中では、たえず新しい細胞と古い細胞との、たえない交替があります。この生命体の中では細胞の秩序ある交替が音もなく進められています。ここに私たちは、自分のからだを死なせることによって生きることができると。生きていくといふことは、からだの一部を死なせつつある。この生と死のたえない交替が生命現象であると考えるのであります。「諸行無常（しよぎようむじょう）万象流転（ばんしょうりゅうてん）」と変化するのが生命の実体であります。徳川時代の大儒者（だいじゆしや）佐藤一斎も「生は是れ死の始め、死はこれ生の終りなり、生ぜざれば死せず、死ぜざれば生ぜず、生は死の因、死も亦生なり」といっています。

このような流転的存在が考えだした哲学、科学といふものが、たえまなく移り変わるのには当然だと思われまふ。したがって、医学の領域においてもたえず進歩がある。進歩があるといふことは、前のことが間違っていたか、あるいは何かの欠陥をもっていたといふことであらうと思います。このように生命といふものは移り変わるものであります。が、ただ一つ注目しなければならぬことは、移り変わりが有限である生命体とおして、無限の世界の、あるいは絶対の体験をする道への足がかりをもっておるということですね。

五感のあいまいさ

私はしだいに死を超えようというとは倫理の彼岸にあり科学の限界のかたの世界であると思うようになりました死をも感謝する世界はもはや宗教よりほかにはないであろうと思うようになりました。

それでは真実の宗教、大乘仏教に入るにはどういう道筋があるかといえは、一つには無常を感じて入る、もう一つは罪悪感に徹することです。けっきょく、我があるあいだは、すべて相対であり、有限であります。この意味で、我をなくする、おのれに執着した考えをすてるということが無限の世界への前提のように思われました。私は医学徒として、罪悪感より無常感でいこうと考えまして、ちよつと氣違いじみておりますが、骸骨（がいこつ）を机の上において、これ人生無常といってみました。しかし、なかなか実感がわいてこないんです。どうしても、おれはまだ若いんだという氣持がどこかにあるわけで「諸行無常 万象流転」といつてみるのですが、どうしても実感がわいてきません。時には仏典をひもといたり、講話を聞いてみたりしたのですが、どうしてもそういう世界に近づくことが出来ませんでした。

そうしているうちに、異様な人物があらわれまして、その人は大きな声で「ナンマンダ」というのです。そうして

いかにも法悦一ぱいといったものをあらわしておりました私はこの人を異状だなど思っていたのですけれども、なにかあるということは感じていました。たしかに生き生きとして念仏をよるこんでおられるのですが、そういう人に接するほど、私の心は淋しくなりました。

「やはり、僕は駄目だ。自分は科学者であり、真理を求めている。自分はそれ以外のものにはひざまずかない」というような潜在意識があるのです。といってもその真理というものはなかなかつかめない。たとえば視覚は実証できる人間の五感器のなかでは一番正確なものであります。ところがその視覚でさえ非常に誤りの多いものなのです。見たつもりでも、実際には真実を見ている場合はむしろ少ないのです。また証拠があればとか、実験ができればとかよくいわれますが、実はそれ自体がまったくあやしいものなのです。たしかにはずの、この証明がたちまち、その反証をよんでまいりまして、それは矛盾を意味します。

わが身をおして

しかし、考えてみますと、聖人が「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごと、たわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とおっしゃっておられますが、この言葉ほど大胆で、しかも語義を強調されたものはないのではないかと

思われます。何かこの世の中で一つでもたよるべきものがあるのでは「私」が残っています。しかしすべては夢まぼろしで、たしかなものとして握れるものは何一つないはずであります。

それ故にこそ、聖人はこの人生をまつこうから否定されたのだと思います。本当に名利業欲（めうりごうよく）など、何か一つ逃げ込めるものがあつたら、真実をみる眼はかすんでしまふに違いありません。どうにもならない、何にもない、これが無我であらうと思います。

ところが眼を転じて、先の『歎異抄』の言葉に「まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とある。その「なきに」という言葉とともに、大悲の念仏を枢軸として、この社会全体が三百六十度回転します。そうすると、凡夫はもとのまますわっているのだけれども、絶対の他力においてすべてのものが生かされる。だからつたない私の目から見ると、力なくして弱りはて、金もなければ、能もない存在であっても、お慈悲の光に照らされるそこに「なる滴の 夜のあらしにくだかれて ちる珠（たま）ま」ごとにやどる月影」という句があるように、おのおの内に真実をみる眼や耳はそなわってくるのだと思いますひとりびとりが永遠の国に生まれることのできる仏の子供であります。私たちはこのきたなく、みにくい、媒体（か

らだ）をとおして、絶対のすくいがえられる。そしてこの救済のなかには、むだなものは一つもありません。そこに真理の光がさんさんと輝いているばかりであります。

ゆきあたり つきあたりせし 業縁の

壁は見えずも 光寂（ひそ）けき

（昭和四十二年十二月同朋誌より）

ゲーテの言葉

或人が私に向って

「君はしきりにホーマーを研究するが、君にはまだ、ホーマーが解っていないじやないか」

と言うたことがある。私はそれに次の如く答えた。

「勿論、私にホーマーが解らないのは、太陽や月や星が解らないのと同じことだ。

然し、太陽や月や星は私の頭の上に動いている。そして、それを見たり、その規則的な驚くべき軌道を観察したりして、私の身は、今如何なるものであるかを知り、又未来には如何になるべきかを考えることができる」

（註）ホーマーはギリシャの詩聖と仰がれた人。

善悪の業報と如来の救済

花 田 正 夫

仏弟子の比丘尼にキサー・ゴータミーが居ります。何時も粗衣にあまんじて、戒律をよくたもって、比丘尼の模範とされた人でありました。その出家の動機は次のようでありました。

若い時、彼女に一人の男の子が生まれましたが、可愛いさかりに突然亡くなりましたので、気も狂わんばかりに悲しみ、死んだ子を蘇らす薬や医師を求めて街から街をさ迷い歩きました。街の人々は涙をもって同情はしますけれども、どうしてあげることも出来ないままに、寄り集っては彼女を見送って居りました。そのうちに、誰からと云うともなしに、口々に

「はやく仏陀のもとに行け！」

と呼びかけました。ゴータミーも漸くそのことに気付いて「仏陀は智慧のすぐれた、慈悲深い方ときいている。この方なればきっと可愛い子を蘇らして下さるであろう」と、とうとう仏陀の許をたずねました。

と、仏陀の善巧ぜんぎょうの大悲に気付いて、ただちに仏所に詣でて自分の愚痴、無智を懺悔申すと共に、亡き子に向っても、「先き立つものは知識」であったと、感謝しつつ、出家して悟りを開くことが出来ました。

可愛い子が生まれ、その子と別れて行く、というきびしい業報の世界に私共は生をうけて居りますが、仏陀の救済のみ手は、無常を無常と正しく自覚せしめて下さると共に、それをそれと気付かず、我身かってな、身びいきばかりの甘い夢に酔いしれていて、いざとなると、愚痴のとりことなつて人を恨み、天をかこつという苦悩に沈みこむ身を、無限の大悲心をもって抱き、あため、よみがえらせて下さるのであります。

善悪の業報は、微塵のくるいもなく、何をもってしても防げさまたふせぐことも出来ないで、おごそかにおこなわれて居ります。然し、それだけでは私共は、自業自得の道理で、暗黒界に沈むばかりで、そこに救いのひかりはさしません世間によく、「あれも因縁だ、これも業報だ」とよく聞きますが、それも他人事の時はそれですみますけれども、いざわが身にふりかかると、「こんなこととは知らなかった」「どうしてこうなったのだらう、情けない」と、限りなく愚痴の涙が流れてやみません。

仏陀は深く彼女をおあわれみになつて

「若しお前が、未だ一度も葬式を出したことの無い家から、芥子粒かいしりゅうを貰ってきたなら、その薬を教えよう」と言われました。ゴータミーは早速家々を訪ねて、芥子粒の有無をきき、葬式のことをたずねますと、何処の家にも芥子の種はありますが、葬式を出さない家はありません。

「今年になつて孫が死にました」とか「昨年末に母を亡くしました」とか「夫に別れ、妻に先だたれた」という家ばかりでありました。

日は暮れる、脚は疲れきつて棒のようになって、望み通りの家は一軒も見つかりませんでした。その時フト彼女の心にひらめいたことは、

「人生は無常！これが本当であつた。自分勝手に子は無事に成長するもの、自分も死なぬものと思ひこんでいたことが愚かであつた。仏陀はそれをさとらせて下さるために、葬式の出ない家を探させて下さったのか！」

ここに、その「兎の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりもつくる罪の宿業ならざるはなし」と、その業報の隅々まで洞察して下さつて、満腔の御同情を注いで下さるよきお方がまします時、初めて心の氷、むすぼれも解けて、「本当に仰せ通りでありました」と業報を業報として受け取ることが出来るのであります。

私共は地獄一定の罪業の生活を続けながら、地獄があるのなのと論じて、自分自身がそれを織り成していると思はらず、一角自分は立派な生活をしていると、うぬぼれと我慢でつきとおして居ります。

近角先生のお譬に、「我々は自分を立派なダイヤモンドの宝石のように考えているが、仏のおひかりに照らされて見ると、ガラスのにせ玉であつたと知らされ、また、自分は悪い／＼と、街に虎が出たように悪をおそれるが、その悪も仏のおひかりに照らされて見ると、張子の虎にすぎなかつたと知らされる」

とありますが、これこそ、煩惱具足の我等凡夫が、火宅無常の世界にあつて、善だ悪だと、妄念妄想によつておりなすそらごとたわごとまことあることない状態を徹底的に教えらるる譬であります。

ここに、仏智照覧の世界と、我々の我見を中心にした迷妄の世界との相違がよく知られるのであります。

ところが、我々は夢の中では夢と知られぬ如く、迷妄の世界にあって、それをそれと気づく力がないので、かえって真実の世界に居ると思ひこんで居ります。法華經に説かれてある有名な火宅三車の譬（かたくさんしゃのたとえ）に、長者の父が帰って見ると、長者の家は火焰につつまれて燃えている、そして庭には毒蛇惡獸がひしめいているが、その中にいる子供達は、かえってそれを見て遊びたわむれている。そこで火があふない、早く外へ出よ、と叫びますが、子供達はキョトンとして、火とは何ですか、あふないとはどうしてですか、と一向に驚きもせず、外に逃げ出そうともしません、そこで親なる長者は色々と方便をめぐらすことが詳しく説いてあります。私共は、その愚かな子供であります。ここに覺者（めざめたひと）の仏陀は無限大悲の心は烈々火と燃えてあらゆる善巧方便の御手をさしのべて下さるのであります。釈尊の八十年の御説法は、応病興藥で、その病状に應じ適切な藥を与えて、その久遠劫來の迷妄の闇夜に灯火を点じて下さったのであります。更に二千五百年の仏教の歴史と伝統は、水の低きに自然に流れるように、釈尊の大悲の法水は濺々としてつぎる時

と も し

び

聚 墨 生

（註）これは中日新聞の依頼で時たまに書いたもので、原稿用紙一枚との制限がありまして文意をつくしません御判読下さい。

二、三年前から手のり文鳥を飼っていて、時々籠（かご）から出して遊ばせる。ある日、ついていたずら心から文鳥を鏡の前に近づけると、鏡にうつる自分の影を、それをそれと知らずに、友として身をすり寄せながらしきりに呼びかけ続けた。それを眺めながら、私には文鳥にお前の影だよと知らず言葉もすべもないのがはがゆかった。

その時、仏教の説話を思い出した。

「主人が家人にもかくして屋根裏に酒瓶（さけがめ）を秘蔵して、時々たしなんでいた。妻がそれをあやしんでその瓶の蓋（ふた）をとってのぞくと、そこに自分の顔が映った。しかし妻はそれと知らずに、主人は女をかくまっていると嫉妬（しつと）し、大騒動がおきた」と。

なく、一切の飢え渴く者の心田（こころ）をうるおして今日におよび、これからもまた人の子の迷いと苦しみの続く限り無窮にそのひかりを放たれるのであります。

如來の御聲

菅 田 豊 吉

我等世の無常に泣き、わが罪惡にもだえ、絶望悲歎の淵に沈んだとき、忽然として声あり

「汝一心正念にして直に來れ、我よく汝を護らん。汝の罪惡煩惱の本は、少我に執着して親たる余を忘れたるによる。然るに余は常に汝を思うて、汝の改過を待つこと久しい。汝はやく一切を捨てて我に來れ、われにまかせよ。しからば死生罪惡の苦しみなく永遠の真樂を得るであらう」

と。我等、切々哀々たる御親のこの御聲を聞くや、嗚呼我等には真実の御親あって、かくまで我を愛し、我を待ち給いしか。嗚呼すまなかつた。されど今親のふところにあつて歡喜悅樂おさえんとしておさえあたわぬのである。これ真心徹到した刹那の光景である。不斷煩惱得涅槃の妙趣である。

さて、時は移り、人は変わっても、おのが影にあるいはおそれ、喜び、浮かれ、悲しみながら、それをそれと気がつかないことは、人類の永い歴史の上にいつまでも繰り返される痛ましい盲点である。文鳥をあわれんだ私が、かえって我身を憐れむことになった。

（四二、五、四日）

○

花心なくして蝶を招き

蝶心なくして花を尋ぬ

花開く時蝶來り

蝶來る時花開く

（良寛師詩）

終戦五年目の夏、私は心臓筋肉障害で「ビビの入った茶碗も大切にすれば」と医師から忠告をうけて生活の大転換をせねばならなくなった。世相はまだ花より団子のころであつた。

とつおいつ思索しながらフト裏庭を見ると、細く弱々し

い一本の糸爪（へちま）が根根にはいのぼって小さいながら黄色の花を見事に咲かせていた。思わずじっとみはれてみると、どこからともなく蛾（が）が飛んで来て蜜を吸いはじめた。

その時である。花が開く時に我（が）生まれ、蛾（が）生まれる時花が開く。蛾（が）は花粉を媒介し、花は蜜を与える。そこに私共の思いをこえた大調和の世界の不思議さに出た。

それと同時に、そうだ、私もヒヨロ長く弱々しい糸爪同様の身であるが、一日一日を大切に念仏の花をいただいて行こう、ただそれだけでよかったんだと大いにうなずいて糸爪の花を合掌した。

（四二、七、二九日）

○ 滅度（めつど）を示現（じげん）すれども

拯濟（じようさい）すること極まり無し

（大無量寿経・序）

離ればうとんじ、遠ざかれは忘れられて行くのが、この世の常の鉄則であるが、これに逆行するものが、私にとって二つある、それは両親であり、釈尊である。

子は両親の膝下にあるときよりも、遠く家郷を離れ、さらに親の亡きあとに、いよいよ切に親が慕われて来るものである。あだかも夕陽が西に没して四圍が暗くなるとき、

星や月のひかりが一層かがやきを増すにもたとえられる。

また釈尊は御在世の時に多くの人々を導き、心にひかりを与えられたけれど、御入滅の後にもいよいよその徳光がかがやいて、二千五百余年の今日、益々そのひかりがあらわれて世の人々をすくわれることは、世の常の鉄則も、時代の流れも、さえることも消すことも出来ないことを知らされる。良寛さん

盗人に取りのこされし窓の月

とのべられたのも、この仏徳のきわまりなきに驚歎されたものであらう。

（四二、九、三日）

○ 如来に調伏（ちようぶく）せられて如来に帰依し

法の津沢（しんたく）を得て信樂の心を生ず

（勝鬘経・義疏）

太陽をさがすのにランプも電灯も無用である。たとえそれで見出したといっても、それはひかりも熱もない、絵画か模型の太陽にすぎない。真の太陽は自身の放つひかりによって自らをあらわにする。そのように直（ただ）実（じつ）は他の力を要としない、自動を性とする。

私どもは自分の知恵や経験をたよりにして如来をさがし求めるが、そこには概念の如来、手造りの如来しか見出せ

ない。

真実の如来は私どもの知る目も、近づく足も無いことを見ぬかれて、その者を飽くまでも不憫と思召されて、点滴が岩をもうがつるように、私共の心を開いてくださる。

また渡船場や沼沢には、いつも水がうるおうていて、葦（よし）や芦（あし）が繁るように、身辺に仏法の常にただようところに信心の華も薫り咲くものである。

「一輪の花が開くうらには大地が苦しむ」とよく云われるが、信心の華の開くうらにそそがれる如来の御恩はそうした言葉もものの数でない。

（四二、一一、二二日）

○ 賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

愚禿（ぐとく）が心は、内は愚にして外は賢なり

（愚禿鈔、序）

落ちてきたリングに驚いたニュートンは目に見えぬ引力を発見し力学の大成をした。謙虚な驚異の眼によって科学は進められる。ダンテの神曲に、煉獄（れんごく）の旅を終えた求道者が淨罪の島にたどり着くと、海辺に腰折れの芦が茂っていて、腰の高い人には刃となって通さないとある、宗教の門はそうしたきびしさを持つ。

さて、私も宗教の門を叩いてそのけわしさにおののいた

稲の穂はみものほど頭がさがるが、愚かな身にはそれが不可能である。私はこの厚い壁に突き当たって唯己の空虚さに絶望の外なかった。

その時「愚禿（ぐとく）が心は、内は愚にして外は賢なり」との親鸞聖人のお言葉にふれた。智者は自らの愚を知るが、愚者はわれ賢しとしか振る舞えないんだよ、と聖人が私に同座されての教を聞いた。

私は括目（かつもく）した、耳をそば立てた。そこにお念仏の中にっこりとしていられる聖人のお姿が浮んだ。私の全身心が聖人にひきつけられると共に、私も自然にお念仏申すようになった。

（四三、一、一四日）

易行院法海師詠

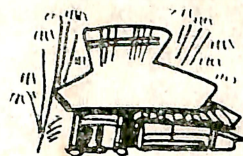
明らけきひかりを四方（よも）の限りにて

又、月のうちなる武蔵野の原

武蔵野のチリチリ草の露だにも

身を細めてそ月は入りぬる

あ と が き



一月号の発行が刑務所の印刷部が入試問題の仕事で多忙を極めたので非常におくれまして、皆様方に御心配おかけいたしました。おわび申します。

さて「二月は逃げる」と昔からよく申します、非常に早く過ぎ去る思いがいたしますが、この月の十五日は釈尊の涅槃の日、また二十一日は聖徳太子の御忌日であります。一つは教主世尊、一つは和国の教主、我々の今日ありますのは、ひとえに二尊の御恩沢によるのであります。有名な釈尊の入涅槃の像には、お弟子はもとより、鳥獸や虫類までお別れを悲しんで居ります。又太子の死去が伝えられると、「是の時、諸王、諸臣及び天下の百姓、ことごとくに長老は愛児を失うがごとく、塩酢の味、口にあれども嘗めず少幼者は慈父母を亡うが如くに、哭き泣く声、行路に満てり。すなわち耕夫は手を止め、春女は杵せず。皆曰く日月輝きを失いて天地すでに崩れぬべし、今より後、誰をか恃まむや」と誌されてあ

ります。来年は期し難いきびしい人生、この月にあたらしく御恩を仰ぎましょう。

○ 昨年末ウインのカレルギー伯が日本各地を遊説して、友愛精神を力説し「今や世界は二分して、共產圏では平等を、資本主義圏では自由を互に理想として、これに反するものは敵である、そのためには生命を捨てて進むというきびしい対立と斗争がくりひろげられているが、そこに大切なのは友愛の精神である。それはキリスト教では、父なる神のもとに皆兄弟のしたしめを持ち、仏教では世々生々の父母兄弟と教えられている。その精神の建現が切に望まれる。歐洲では、十年毎に戦争をくりかえしたドイツとフランスが和解して、汎歐洲思想が実現してきたが東洋では日本人が仏教精神をもとにその高揚の中心に働いて貰いたい」と訴えました。かえりみさせられることであります。

○ それには日本人の一人一人が真の仏教の心を頂くことが中心であ、そこから自然にそうした活動もはじま、あります。太子は日本の危機にあたり御自身に三経を読破されて、そこに国是がひらかれました。我等その道一筋に生き抜きたいものであります。

○ 医学と宗教は、京大の川畑さんが京都の高倉会館で講話されたもので「同朋」に載ったものであります。川畑さんの御好意

から本誌にいただきました。今更に念仏の流布する日本の国のありがたさを知らされますことでもあります。

御 案 内

◎ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。

市電新郊通り一丁目下車。東へ入ル三筋目を左入ル二軒目。

但し三月と四月の第一日曜は、津市出張のため休ませて頂きます。

◎ 毎月二十四日、午前・午後、昭和区小椋町、教西寺、法話会。市電、御器所通り下車、桜花学園の東側

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大宇福谷
印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番